



本週間 10月1日~10月7日

＜準備期間 9 月 1 日～9 月 30 日＞

「全国労働衛生週間」スローガン

「ワーク・ライフ・バランスに意識を向けて ストレスチェックで健康職場」



(1) 公布日 令和7年4月15日

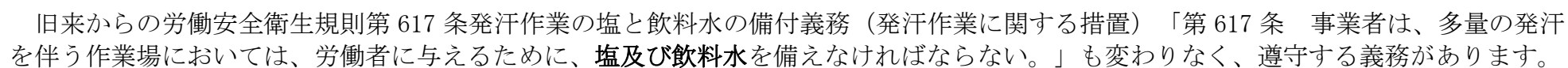
(2) 施行日 令和7年6月1日

熱中症の重篤化による死亡災害を防止するため、WBGT（湿球黒球温度）28 度又は気温 31 度以上の作業場において行われる作業で、継続して 1 時間以上又は 1 日当たり 4 時間を超えて行われることが見込まれる「熱中症のおそれがある作業」を行う事業者には、熱中症のおそれがある作業者を早期に見つけ、その状況に応じ、迅速かつ適切に対処するよう、労働安全衛生規則が改正され、次の規定が新設されました。

(熱中症を生ずるおそれのある作業)

第612条の2 事業者は、暑熱な場所において連続して行われる作業等熱中症を生ずるおそれのある作業を行うときは、あらかじめ、当該作業に従事する者が熱中症の自覚症状を有する場合又は当該作業に従事する者に熱中症が生じた疑いがあることを当該作業に従事する他の者が発見した場合にその旨の報告をさせる体制を整備し、当該作業に従事する者に対し、当該体制を周知させなければならない。

2 事業者は、暑熱な場所において連続して行われる作業等熱中症を生ずるおそれのある作業を行うときは、あらかじめ、作業場ごとに、当該作業からの離脱、身体のコリ、必要に応じて医師の診察又は処置を受けさせることその他熱中症の症状の悪化を防止するために必要な措置の内容及びその実施に関する手順を定め、当該作業に従事する者に対し、当該措置の内容及びその実施に関する手順を周知させなければならない。



これらの規定は、熱中症予防というより救護措置規定ですので、まず、誰が発症者を救護するかというと近くにいる他の作業者です。では、労働者全員が熱中症がどういう病気なのか何故死にいたるのかということを知っている必要があります。

1. 体温の維持調整機能

人には、脳の視床下部に体温を一定に保つための生理的なメカニズムである体温調整機能があります。

体温調整のメカニズムは、無意識に行われる自律神経の働きによって制御されています。皮膚が寒さや暑さを感知し、その情報が脳に伝わり、体温を維持する指令が出されます。 **体温が下がると**、体内での代謝活動によって熱が生成され、運動や食事によって体温を上昇させます。 **体温が上がると**、脳は汗をかくことや血流を増加させることで体温を下げようとします。逆に、寒い環境では、体温を逃がさないように血管を収縮させ、熱を保持する体温の調整機能が働きます。こうした体温の維持機能により、健康な人の体温は通常 36℃から 37℃の範囲に保たれています。これは、体内での化学反応が最適に行われるために必要な温度です。

2. 熱中症とは何か

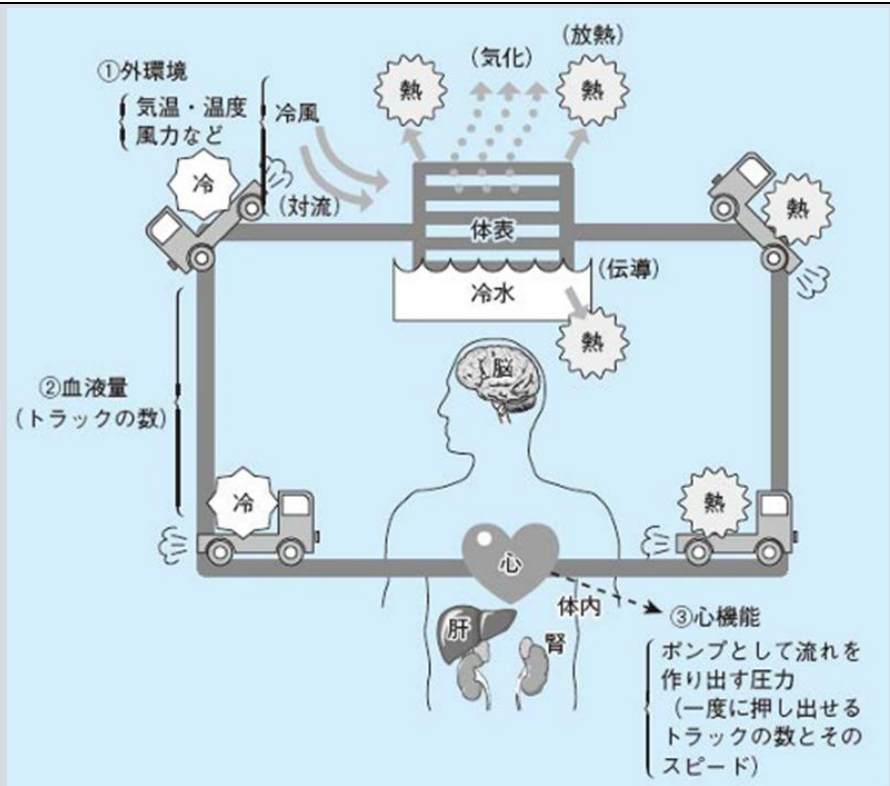
熱中症は、高い外気温による体温上昇に起因する体温調整機能の喪失と高体温による組織および臓器障害です。熱中症の症状は多彩で、診断基準のない難しい病気ですが、普段健康な人でも短時間で死に至る可能性がありますので、医療関係者がいなくても、的確な救護処置をすぐ始めないといけません。労作性熱中症の致死率3~5%です。

2. 熱中症の原因

作業環境の高気温や高湿度は、労作性熱中症のリスク因子です。これに運動や肉体労働に伴う熱産生のバランス異常が原因に加わりま
す。無理な作業、不適切な衣服の選択、労働に必要な装備（ヘルメットや防護服）などがきっかけになります。

3. 熱中症の分類 (日本医学会による熱中症の用語)

熱中症		暑熱障害による症状の総称
(軽症)	熱失神	発汗作用による皮膚血管の拡張により血圧が低下し、脳血流が減少して起こる一過性の意識消失
	熱虚脱	
	熱痙攣	
(中等症)	熱疲労	(水分の過剰摂取による) 低ナトリウム血症 (血液中 Na 濃度 135mEq/L 未満) による筋肉の痙攣が起こった状態
(重症)	熱射病	大量の汗により脱水状態となり、全身倦怠感、脱力、めまい、頭痛、吐気、下痢などの症状が出現する状態
		体温上昇 (時には 40℃ 以上) のため中枢神経機能が異常をきたした状態



金沢労働基準監督署

(一社)金沢労働基準協会